Skt. *argha-/arghya-*, 閼伽(あか), Lat. *aqua*

笠松　直
仙台高等専門学校

要旨

サンスクリットの男性名詞 *arghá-* は「(金銭的、世俗的、物質的な) 価値」ないし「(有用性、重要性、優秀性等の観点からの) 価値、値打ち；敬意」を意味する。*arghya-* は、その形容詞派生形であって、第一義的には「価値ある」を意味する。儀礼の文脈で単独で、あるいは中性名詞 *udaka-*「水」を伴って「儀礼 (供養) に用いる水」を意味し、「閼伽(あか)」と漢訳 (音訳) される。

この「閼伽」と *arghá-/arghya-*、ラテン語 aqua の音 (と、部分的な語義) の類似に基づき、これらが同じ語源に遡るという誤解が生じることがある。時折専門家がこの民間語源説を否定するものの、その説明は簡略に過ぎた。本稿はこの件について詳細な情報を求める向きの便を図るべく、インド原典から当該語の用例を系統的に取り纏めて資料提供を行う。

Key words: *argha-*, *arghya-*, *aqua*, 閼伽

1. はじめに

『徒然草』第十一段「神無月のころ」は、高等学校の国語 (古典) の教材として採用されることも多く、『徒然草』中、最もよく知られた一節のひとつであろう：

> 神無月のころ、来栖野といふ所を過ぎて、ある山里に尋ね入る事侍りしに、遥かなる苔の細道を踏み分けて、心ぼそく住みなしたる庵あり。木の葉に埋もるゝ懸樋の雫ならでは、つゆおとなふものなし。閼伽棚に菊・紅葉など折り散らしたる、さすがに、住む人のあればなるべし。
>
> かくてもあられけるよとあはれに見るほどに、かなたの庭に、大きなる柑子の木の、枝もたわゝになりたるが、まはりをきびしく囲ひたりしこそ、少しことさめて、この木なからましかばと覚えしか。

ここに「閼伽棚(あかだな)」の語が見える。「棚」はさておき、いかにも外来語然とした「閼伽」の語義を確かめようと、学生は辞書を引くことだろう。試みに手元の新村『広辞苑』(1983: 14b；1991: 16a；2008: 18d) を引けば、サンスクリット対応語形として *argha*, *arghya* を挙

げつつ「貴賓または仏前に供えるもの。特に水をいう。また、それを盛る容器」と見える。『精選版日本国語大辞典』には「梵 argha, arghya「価値」の意で、敬意を表す贈り物のこと。功徳水と訳す」とある（小学館 2006: 35c）。簡にして要を得た説明である。

ところが以下の辞書では、「閼伽（*arghya-*）」がそのまま「水」の語義を持つかのように読める：「仏や墓にそなえる水。また、その容器。サンスクリット語で「水」の意味」（小学館 1997: 6a）。やや古いが、仏教語辞書にも以下の如く見える：「閼伽［術語］又阿伽に作る Arghya の略，譯，水。【名義集二】に「阿伽。此云水。」但し内典には，殊に佛に奉る水をさしていふ。即ち水に香花を入れたるもの」（織田 1917: 9 下）。

ここにサンスクリット *argha-*（< 印欧祖語 $*h_2elg^{wh}ó$-）とその形容詞派生形 *arghya-* と閼伽、更にラテン語 *aqua*（< 印欧祖語 $*ak^{w}ā$）との間に意味の連関を仮想する余地が発生する。即ち、「閼伽」の原語（*arghya-*）が即ち「水」であると理解（誤解）してのち、ラテン語 *aqua*「水」を想起して、語感の類似と語義の（偶然の）一致を見いだす。次いで「ラテン語とサンスクリットとは同系の言語である」という知識を根拠に、これらの 2 語を同語源だと想像する[1]。このような向きが、孤立的または散発的ながら発生する。

例えば白洲は、「若狭」の語源を巡って以下のように書く：

> 「ワカサの語原については色々の説があるが、水はアイヌ語ではワッカ、ラテン語ではアクア、梵語ではアーガャ、即ち閼伽の水で、いわば国際語といっていい。穢れを浄めるものとして、神聖視されたのも、世界共通の思想であろう。ひいては霊魂を復活させる「変若水」の信仰に、発展して行ったこともうなずける。おそらくワカサの地名は、水の豊かな国に、若々しい魂を想像し、その二つのイメージが重なって出来たものに相違ない」（白洲 1992: 87f.）

ここでは凡そ水をワカ、アカ、アクアのような発音の語で呼ぶことが国際的に通用したと想像されている。

同様の発想に立って五木も以下のように語る：

> 「閼伽井屋の「閼伽」は、サンスクリット語の「argha」（アクア、アグア＝価値あるもの）が音訳された言葉で、それが「聖なるものに捧げる水」の意味に転じたという。「アクア」と同じ語源だ。おそらく寺や神社ができる以前から、ここにはこういう自然の湧き水があったのだろう。地元の人たちはこれを「聖なる水」と感じたにちがいない」（五木 2008: 25）

しかし「諸言語を比較する場合、偶然にも形態と意味が類似していることがあるから注意を要する」（堀井 1997: 4f.）。ラテン語 *aqua* とサンスクリット *argha-/arghya-* とは、偶々語の形態と意味とが類似するに至ったが、音韻的には対応しない。共に「神」を意味する

---

[1] 小川博仁氏の私信によれば、既に上田萬年他編『日本外來語辭典』（三省堂 1915）s.v. Aka（阿伽、閼伽、遏伽）に「…argha も亦「供養」の義にして、香華水を含める名なれども、水のみの称呼としては其例を見ず…Ainu 語の wakka、羅甸語の aqua、Gothic の ahva 等には相関する所なし」とある由（原文カタカナを平仮名に、旧字体を新字体に変更）。大正 4 年頃迄に既にラテン語・ゴート語（乃至アイヌ語）との同語源を想像する向きがあり、態々断り書きを付加する必要があったものかと小川氏は思料する。

ギリシャ語 *theós* とラテン語 *deus* とが本来無関係であることが思い起こされる。あえて言えば、歴史的に音韻変化を経た結果として類似していることは、むしろ語源的には別の語であったことを示唆する。例えば「ペルシア語の bad「悪い」は英語の bad「悪い」と類似している」という（堀井 1997: 56）。この際「私たちは、言語の親族関係を証明するためには、こうした偶然の一致を排除することに努めなければならないのである」（堀井 1997: 5）。

諸種の仏教辞典は、「閼伽」が元来「価値あるもの」の語義であり、意味展開して「功徳水」と意訳される事情を説明する。既に大正年間初版発行の辞書にほとんど完全な説明を見ることができる：

「argha 漢字音、遏迦・阿伽・遏伽に作る。もと價値あるものゝ義にして、神佛に捧げらるゝ種々の供物を云ひしが、轉じて器物を稱するに至れり…（中略）…然るに後更に轉じて專ら供佛の水を閼伽と稱するに至る。蓋し印度にては神佛に供物を奉るには必ず水を添ふる習慣あるを以てなり…（中略）…故に翻譯名義集には「閼伽此に水と云ふ」と云へり…（後略）…」（龍谷大学 1914: 9）

このほか任意に数例を挙げれば以下の通りである：「巴梨名 aggha. 西蔵名 mchod-yon. 又遏伽、或は阿伽に作る。功徳、功徳水、又は水と譯す」（望月 1954: 12 上）；「（梵）アルギヤ arghya の音写。阿伽，遏伽とも書き，功徳水と訳す。価値あるものの意。神仏にささげる種々な供物のこと。転じてもっぱら仏前に供える浄らかな水をいい，また浄水を盛る器をも意味する。…（後略）」（多屋・横超他編 1995: 1 下）；「Ⓢ argha の音写。阿伽・遏伽とも音写し，功徳水と意訳されたりする。（Ⓢ arghya の音写とする説もある。）…（後略）」（中村 2001: 7）。

こうした見解は、先に挙げたとおり、最近の国語辞書にも基本的には正しく継承されている。ただし誤った説明が一部古い学習辞書等に残存し、恐らくそうした情報源に依拠する人々が間欠泉的に現れるもののようである。例えば久保（2010）は以下の如く述べる：「アカは、板子一枚下は地獄の船乗りには忌み言葉である水に代わり、仏前に供える聖水を表す仏教用語の「閼伽（あか）」を転用したという。閼伽の語源はサンスクリットだが、西方に伝わりラテン語のアクアに転じたとの説もある」（下線引用者）。

先学は折に触れてこうした誤解を正そうとしてきた。以下管見の限り数例を挙げる：

（ラテン語の *aqua* と）「梵語 argha（閼伽）とは偶然似通った語形をしてはいるが、両者は全く関係のない他人の空似である．…（中略）…繰返しいうまでもなく argha は本来の水を意味する梵語ではない．すでに独断乃至早とちりを踏まえての語源談義である」（中島 1976: 266f.）

「ところで、仏に供える水の器を置く棚である閼伽棚（あかだな）の語源はサンスクリットで、ラテン語の aqua と同根である、などと今だに書く人がいるが、これはすべてとんでもない妄説である」（小林 1992: 37）

「たとえば、仏教語で「閼伽」ということばがあります。「閼伽棚」の「閼伽」で、こ

れは、仏前に供える水のことです。これを、ある有名な人が、「水」を意味するラテン語の「アクァ」（長時間の潜水にさいして用いられる空気供給のための道具であるあの「アクァ・ラング」の「アクァ」です）の転じたものだと論じ[2]、これが、かつて、常人の意表をつく斬新な解釈だとして、堂々と世間にまかりとったことがあります」（宮元 1994: 209f.）

「さて、このような供養にさいして神仏や高僧に差し出される貴重な供物を、インドでは「アルギヤ」といいます。これは、音を写した漢訳語で「閼伽」といいます。そして、仏壇の近くに供物を用意する棚が作られましたが、これを「閼伽棚」といいます。そこにいつも置かれているものは水でしたので、いつしかわが国では、仏様に備える水のことを閼伽というようになりました。戦前、「閼伽」の語源は「水」を意味するラテン語の「アクァ」だという説が流れましたが[3]、まったくの間違いです」（宮元 2005: 37）

小林や宮元が如何に強調しようとも、ひとは学者や辞書や有名文化人等々の権威が異なる意見を述べるのをみて、「民主主義」的に両論併記をする、あるいは自分の好みの、夢にあふれた奇想天外な説を採る。結果「悪貨が良貨を駆逐する」の一例となる。

現在ではインターネットが発達し、一般読書人であっても、理性的な努力を積み上げれば学術的な正解に辿りつくことが可能となっている[4]。しかし実際の文献に即した、その意味で地に足の着いた議論には届かない。そこで以下、*argha-/arghya-* の用例を時代と意味展開の次第に沿って辿った資料の提供を試みる。特徴的な語形に当該文献の成立に関わる問題等を垣間見ることもできよう。

2. *arghá-, arghya-* の語義

ここで *arghá-, arghya-* の語義とその展開について纏めておく。

男性名詞 *arghá-*（RV+）の語義は ‘Wert, Preis’（MAYRHOFER）、‘value, worth, price’ ないし ‘gift of honour, honorific gift’（CAPPELLER, MACDONELL）である。即ち「（金銭的、世俗的、物質的な）価値」（→ 2.1）または「（有用性、重要性、優秀性等の観点からの）価値、値打ち；敬意（ないし敬意を表明する贈り物）」（→ 2.2）を意味する。

他方、*arghya-* は上掲の男性実体詞 *argha-* の形容詞派生形であって、第一義的には「価値ある」を意味する。実際には主として儀礼の文脈で「敬礼に値する」「敬礼の儀礼に用いる（関わる）」を意味する。中性名詞 *udaka-*「水」を伴うこともあるが、殆どの用例箇所において単独で用いられて「儀礼（供養）に用いる水」を意味する（→ 2.3）。但し、「供養に用いる水」を意味する実体詞へ全面的に転化するのではなく、形容詞としての用法は忘却されない。男性活用を示して「敬意に値する人物」を意味することもある（→ 2.4）。

---

(2) これは岩田一男『英単語記憶術』（光文社 1967 年，筆者未見）を指すものかと思われる（hakuriku 2003）。当該書には「aqua は，がんらい梵語で，「供養」の意。これから，「供える器」→「器の中の聖水」→「水」と変化した」とある由（「まんどぅーか 2004 による）。

(3) 前掲注 1 を参照。既に大正 4 年には人口に膾炙していたものと推察される。

(4) 前掲注 2 に挙げた 2 サイトの記事がその代表例と思われる。また、Ninna-ji Official English Blog 2011 は、閼伽棚 *Akadana* を紹介するなかで「閼伽＝aqua」は単に folk etymology であると明言している。

2.1 Veda 文献での用例 I　（「価値」の意味）

arghá- は、Veda 文献古層には複合語の支分としてのみ用例が見られる。以下に RV（紀元前 1200 年±）および AV（紀元前 1000 年±）に見られる形容詞 *sahasrārghá-*「千［頭の牛の価］に値する」の例を以下に見る：

RV X 17, 9　*sárasvatīṃ yā́m pitáro hávante dakṣiṇā́ yajñám abhinákṣamāṇāḥ /*
sahasrārghám iḍó átra bhāgáṃ rāyás póṣaṃ yájamāneṣu dhehi // 9 (5)

右の方を祭式へと到達しつつある父祖たちが Sarasvatī と呼び掛ける、［その者＝君は］ここに、滋養の千［頭の牛の価］に値する（*sahasrārghá-*）分配を、財産の増大を、祭主たちの間に置き定めよ。

AVŚ XIX 33,1　*sahasrārghā́h* [AVP-K *saḥasrārghyaś*] *śatákāṇḍaḥ páyasvān*
apā́m agnír vīrúdhāṃ rājasū́yam /
sá no 'yáṃ darbháḥ pári pātu viśváto
devó [AVP *daivo*] *maṇír āyuṣā́* [AVP-O *āyudhā*] *sáṃ sṛjāti* [AVP-K *sṛjātu*] *naḥ //* (6)

千［頭の牛の価］に値し、百の部分を持ち、乳に富む水たちの［そして］植物たちの［中の?］火は Rājasūya（王の即位祭）を支配している。そこでこのダルバ草は我々を、あらゆる点ですっかり守れ。神たる宝珠は寿命と我々を結び合わせる（一緒にする）がよい。

上掲の 2 例において *sahasrārghá-* は金銭的な意味における「価値」を意味している。

次に Yajurveda-Saṁhitā 諸文献（紀元前 800 年±）での用例を見る。TS *dhanārghá-*, *goarghá-*, *ágoargha-* さらに KS-KpS *bahvarghá-* も同様に金銭的な「価値」を意図して用いられている：

TS II 2,6,4p　*saṃvatsaró vā́ agnír vaiśvānaró. yadā́ khálu vái saṃvatsaráṃ janátāyāṃ cáraty, átha sá dhanārghó bhavati*

一年間が Agni Vaiśvānara なのだ。周知の如く、一年の間、ひとが人々の間を［巡り?］往く場合、つまり彼は財産に値する者となる。

TS VI 1,10,1p　*yát <kaláyā te śaphéna te krīṇānī́-> -ṭi páṇetā́goarghaṁ sómaṃ kuryā́d, ágoargham yájamānam ágoargham adhvaryúṃ. ... <gávā te krīṇānī́-> -ṭy evá brūyād. goarghám evá sómaṃ karóti, goarghám yájamānaṃ goarghám adhvaryúm ...*

もし『［牛の］1/16［の価］で君を［あるいは］［牛の］1/8［の価］で君をわたしは買おう』と［考えて，ひとが］取引するなら、ソーマを［一頭の］牛に値しないものとしかねない、祭主を［一頭の］牛に値しないものと、アドヴァリュ［祭官］を［一頭の］牛に値しないものと［しかねな

(5) RV X 17,9cd ~ AV XVIII 1,43cd; 4,47cd *sahasrārghám iḍó átra bhāgáṃ rāyás póṣaṃ yájamānāya dhehi*.

(6) RV に並行句の無い AV の独自詩節（~ AVP-O XI 13,1 ; AVP-K XII 5,1）である。
Paippalāda 派のうち Kashmir 伝本でのみ *sahasrārghya-* の語形を示すことは興味深い。(°)*arghya-* の形をとるのは、Veda 文献を通じて AVP-K XII 5,1 *sahasrārghyas* と BAU-K VI 2,4 *arghyam*（→ 2.2）との 2 例のみである。AVP-K の編集ないし伝承の過程で何らか特殊な事情が介在した可能性が考えられる。

い]。…（中略）…『牛一頭で君をわたしは買おう』と言うべきだ。ソーマを、他ならぬ［一頭の］牛に値するものとすることになる、祭主を［一頭の］牛に値するものと、アドヴァリュ［祭官］を［一頭の］牛に値するものと。…（後略）…

KS II 6:11,17f.[m] *sómaṃ te* [12,1] *krīṇāmy ū́rjasvantaṃ páyasvantaṃ vīryā̀vantaṃ bahvarghā́ṁ śóbhamānam* // (~ KpS I 19:16,2f.[m])

私は君のソーマを買う、滋養に富み、乳に満ち、精力あり、多くの価値があり（*bahvarghá-*）、輝かしくなりゆく［ソーマ］を。

やや新層に属する Veda 文献である Br.文献（紀元前 650±）に *ánargha-*「価値なき」が見られる：

ŚBK VII 3,1,9 *yát sī́saṁ, híraṇyarūpaṁ sád ánargham mṛdú nírvīryam*

鉛ということであれば、［これは］貴金属の見かけをしてはいるが、価値なく、柔らかく、力を欠いている。

なお、上掲 ŚBK VII 3,1,9 に対する ŚBM 並行箇所は *ná ... arhati* との動詞表現を用いる：

ŚBM V 4,1,10 *tásmād dhíraṇyarūpaṁ sán ná kíyac canā̀rhati*

それ故に［鉛は］貴金属の見かけをしてはいるが、些かにも値しない。

いわゆる南方仏教の経典、すなわちパーリ語仏典[7]では、ŚBM と同一の構文（[*na* ...] *agghati*）を用いるほか、[*na* ...] *aggham eti* という語法が見られる：

SN I 19,16f. *ken' esaṃ yañño vipulo mahaggato samena dinnassa na aggham eti*
sataṃ sahassānaṃ sahassayāginaṃ kalam pi nāgghanti tathāvidhassa te ti.

「何故、これらの人々の壮大で偉大な祭式は、正しく施与されたものに値しないのですか？ 千の祭式をする人々が千の百（i.e. 十万）いても、彼らはそのような類の（正しく施与する）人の 1/16 にも値しません」と。

以上、サンスクリット *argha-*（パーリ語 *aggha-*）が主として（金銭的な）「価値」を意図して使用されていることが理解される。ここには「*argha-*＝水」と理解する余地は全くない。

この用法は後の時代にも確認される。パーリ語文献『ミリンダ王の問い』と大乗経典『法華経』から各一例を以下に挙げる：

Miliñda-Pañha 243,31ff. *yathā mahārāja kāmadadassa maṇiratanassa na sakkā dhanena aggho parimāṇaṃ kātuṃ ...*

---

[7] パーリ文献原典は全て The Pāli Text Society 本に拠った。

あたかも、大王よ、望みの物を与える宝珠の値段は、財産によっては計量することができないように…。

Saddhp I 37 *vastrāṇa koṭīśata te dadanti sahasrakoṭīśatamūlya kecit /*
anarghamūlyāṃś ca dadanti vastrān saśiṣyasaṃghāna jināna saṃmukham //

彼ら［菩薩たち］のある者たちは 1000 億の価値のある 1 億着の衣服を与える。そして値段の付かない価値のある衣服を与える—弟子の集団を伴う、勝利者（仏陀）たちの面前で。

2.2 Veda 文献での用例 II （「敬意」に係る意味 I）

*argha-*が「敬意（の表明）」の意味で用いられることは、Veda 文献最新層の Upaniṣad 文献（紀元前 600 年前後±）段階に始まるものと思われる。以下に挙げるのがその初例である：

ŚBM XIV 9,1,7 *sá ā́jagāma gautamó. / yátra pravā́haṇasya jáivaler ā́sa. tásmā āsanám āhā́ryodakám* [K *āhṛtyodakam*] *āhārayā́ṃ cakārā́tha hāsmā arghám* [K *arghyaṃ*] *cakāra. //* (~BĀU-K VI 2,4)

Gautama（Uddālaka Āruṇi）は Pravāhaṇa Jaivali のいるところへやって来た。彼（P.J.）は彼（U.Ā）のために、座席を持って来させてから、水（*udaka-*）を持って来させた。次いで当の者にもてなしをした（*argham* [BAU-K *arghyam*] *KAR*）[8]。

先に挙げた *argha-*に対する龍谷大学編『佛教辭彙』の説明を想起されたい：「もと價値あるものゝ義にして、神佛に捧げらるゝ種々の供物を云ひし」もので、「蓋し印度にては神佛に供物を奉るには必ず水を添ふる習慣あるを以てなり」。実際は上掲用例に見られるように、「*argha-*をなす」とは神仏に限らず、客人接待のために座席や足洗い、口漱ぎの水等を供することをいうものである。

なお、BAU-K が *arghyam*「もてなしに関わる（こと）」の語形を用いていることに注意したい[9]。Veda 文献を通じて *-ya-* で拡張された語形を示すのは、ほかに複合語後分に見られる一例（AVP-K XII 5,1 *sahasrārghya-*）のみである（前掲注 6 を参照）。

---

[8] この構文はパーリ語仏典にも散見される：DN II 240,16ff. *'āsanaṃ udakaṃ pajjaṃ madhupākañ ca brahmuno, agghe bhavantaṃ pucchāma. aggham kurutu no bhavaṃ.' 'patigaṇhāma te aggham yaṃ tvaṃ Govinda bhāsasi'* ...「[ここに用意した] 座席と、水（*udaka-*）と、足油と、糖蜜とが梵天のものだ。供敬（*aggha-*）について貴殿に尋ねる。君は、貴殿、我々への供敬をなせ」「君の供敬を受け取ろう、君が、Govinda よ、語るところの」；Jātaka IV 396,7f. *āsanaṃ udakaṃ pajjaṃ patigaṇhātu no bhavaṃ agghe bhavantaṃ pucchāma. aggham kurutu no bhavan ti* (= 476,29f.)「我々の［用意した］座席と水（*udaka-*）と足油を受け取れ、貴殿。供敬について貴殿に尋ねる。君は、貴殿、我々への供敬をなせ」。

パーリ語 *aggha-* は、*argha-* ないし *arghya-* 何れから導かれるか判別困難である（参照：PED 5*l* 1) *'price, value, worth'*. 2) *'an oblation made to a guest'*；CONE 15 aggha[2], m.n. *'hospitality, respectful reception of a guest; an offering of water etc to a guest'*）。但し、*arghya-* から説明しうる *agghiya-*の語形も存する：Jātaka V 324,5f. *paṭiggahītaṃ yaṃ dinnañ ca sabbassa agghiyam kataṃ, nandassāpi nisāmetha vacanaṃ yaṃ so pavakkhati*「施与したものは受け取られた、皆にとって価値ある［こと］が為された。Nanda の言う事を［君たちは］傾聴してほしい、彼が公言することを」。

[9] MAYRHOFER (1992) s.v. *arghá-* は *arghya-* を 'Ehrengabe' の意味の中性名詞とし Sūtra 文献以降にその例を見ると説明するが、上掲引用箇所に見る通り BAU-K に初例を見る。

2.3 祭式の文脈における用例 （「敬意」に係る意味 II）

他方、やや後代に属する祭式文献群においては形容詞 *arghya-*（「儀礼に関わる（用いる）」「供物として用いる」さらに「敬意を表す」）の用例が散見される。

以下の BaudhŚS の例では男性活用形を示している。背後に意図されているのは男性名詞 *odana-*「粥」であろう：

> BaudhŚS XVII 44:326,1ff. *athāsmā odanam āhārayati / tam aśnāti <brahma tvāśnātu brahma tvāśnātv> iti. / tac catuṣṭayo 'rghyo dadhi madhu ghṛtam āpa iti*
>
> 次に、当の者のため、粥を持って来させる。それを［祭官は］食べる：＜祭官階級は君を食え、祭官階級は君を食え＞と［唱えて］。その際、四種の表敬用の［粥の材料］が［用いられる、つまり］酸乳、蜜、バターオイル、水たちが。

次に挙げる LātyŚS で *arghyam* と中性名詞の活用をするのは、中性名詞 *udaka-*「水」を背景にするものと判断される[10]：

> LātyŚS I 2,2 *tatraitad āharanti viṣṭaraṃ pādaprakṣālanam arghyam ācamanīyaṃ madhuparkam iti /*
>
> その際, 以下の物を人々（祭主たち）は用意する：茣蓙、足洗いの［水］、敬礼［儀礼］用の（*arghya-*）［水］、啜り用の［水］、マドゥパルカを。

以上、諸種の用例を辿ってきたが、儀軌文献に至ってようやく *arghya-* が「（儀礼、特に客人接待に用いる）水」を意味する用例に出会った。仏教語辞典が繰返し説明するように、インドでは神仏の供養や客人接待儀礼に水の提供が欠かせない。客を迎える定型表現に頻出するため、我々は *arghya-* が中性名詞の活用を示し、実体としては水を意図する例を多数知っている[11]。しかしそれはあくまで背後の中性実体詞 *udaka-*「水」を予定した用法に由来するものなのである[12]。

---

(10) 参照：ŚāṅkhŚS IV 21,4 *arghyam ity ukto 'paḥ pratigṛhya /*「＜*arghya* を＞と言われたら，［祭主は］水たちを手に取って…」。

(11) 例えば：YājñSmṛ I 228 *<yā divyā> iti mantreṇa hasteṣv arghyam vinikṣipet /*「＜天の［水］なるもの［…］＞という祝詞と共に、［祭官たちの］手に *arghya*［の水］をそれぞれ注ぐべきだ」；Rāmāyaṇa I 9,17 *gatānāṃ tu tataḥ pūjām ṛṣiputraś cakāra ha / idam arghyam idaṃ pādyam idaṃ mūlaṃ phalaṃ ca naḥ //*「他方それから、赴いた彼女たちへのもてなし（pūjā）を聖仙の息子は為した。『これが口漱ぎ［の水 *arghya-*］だ、これが足洗い［の水 *pādya-*］だ、これが［食用の］根だ、そして我々の果実だ』［と言って］」；VII 93,9 *tasmai rāmo mahātejāḥ pūjām arghyapurogamām / dadau kuśalam avyagraṃ praṣṭum caivopacakrame //*「彼に、偉大な威光を持つラーマは、*arghya*［の水］をはじめとするもてなし（pūjā）を与えた。息災かと、静かに、そして他ならぬ問いをし始めた」。

(12) 例えば以下の例では *udaka-* を伴う：Rāmāyaṇa II 48,16 *tasya tad vacanaṃ śrutvā rājaputrasya dhīmataḥ / upānayata dharmātmā gām arghyam udakam tataḥ //*「思慮深いかの王子（Rāma）のその言葉を聞くと，法をその自己とする［Bharadvāja 仙］は雄牛を，*arghya* の水を（*arghyam udakam*）そこに持って来させた」。あるいは『シャクンタラー姫物語』第四幕、シャクンタラー姫の非礼に怒って去ろうとするドゥルヴァーサス仙を引き留めるため、プリヤンヴァダーにアナスーヤーが言う：「行きなさい。［彼の］両足許に身を屈めて、当の者を引き返させなさい。私はもてなしの水（*arghyodaka-*）を設えておきますから *gaccha / pādesu paṇamia ṇivattehi ṇaṃ / jāva ahaṃ agghodaaṃ ubakappemi /* (*gaccha / pādayoḥ praṇamya nivartayainam / yāvad aham arghyodakam*

2.4 社会的な「敬意に値する」ことを云う用例 （「敬意」に係る意味 III）

以上、2.3 に扱った用例では、*arghya-* は「儀礼に用いる」ほどを中核的な語義としているように考えられる。儀礼の文脈でも水以外の実体（「粥」）に係る例があったが、実際には「水」に係る例が多数を占め、特に後代においては *arghya-* は中性実体詞化し了えたかとさえ思われる。しかし例は少ないながら、社会的に「敬意に値する」長上、要人を意味する例も存することは記憶に値しよう：

ŚāṅkhŚS IV 21,1 *ṣal arghyā bhavanty: ācārya ṛtvik śvaśuro rājā snātakaḥ priya iti*

「敬意に値する六者が用いられる：師匠（*ācārya-*），祭官（*ṛtvij-*），舅，王，沐浴者，身内の者（?）とが」

YājñSmṛ I 358 *api bhrātā suto 'rghyo vā śvaśuro mātulo 'pi vā /*
nādaṇḍyo nāma rājño 'sti dharmād vicalitaḥ svakāt //

兄弟でも、息子であれ敬意に値するひと（*arghya-*）であれ、あるいは舅や母方のおじであっても、己の義務から逸脱した者なら、王の刑罰の対象とならない者は、つまり、存在しない。

*arghya-*は実体詞 *argha-*の形容詞であるとの意識は永く維持されたものと考えられる。

3. おわりに

仏教語「閼伽」がサンスクリット *argha-*「価値」ないし *arghya-*「価値ある」の音写語であること、ラテン語 *aqua* と語感は似ているものの全く別の単語であることは早くから正しく説明されてきた（→ 1）。それにも拘らず *aqua*「水」＝ *arghya-*「供養に用いる水」同源説は散発的に繰り返されてきた。一部の専門家と一般読書人とがこの「妄説」（小林）を否定する発言や考察を行ってきたが、遺憾なことに説明はしばしば簡略に過ぎ、隔靴掻痒の感を抱く向きもあったかもしれない。本稿は同学諸兄の便を図るべく，この件についてインド学側からの原典資料の提供を試みた。

最後に二、三の論点を提示して終りの言葉としたい。

宮元（2005: 37）は以下の如く言う：「戦前、「閼伽」の語源は「水」を意味するラテン語の「アクァ」だという説が流れました」。少なくとも『日本外來語辭典』が発行された 1915（大正 4）年には流布していたはずであるが、この火元については筆者未詳である。

漢訳大蔵経中、「閼伽」の用例は概ね密教文献に遍在している[13]。これが *argha-*（ないし *arghya-*）を意図した音写であることは疑いない。ただし密教文献の多くは対応するサン

---

upakalpayāmi /)」（MONIER-WILLIAMS 1876: 138）。

[13] 専ら「閼伽」が用いられるといって差し支えない。諸種仏教辞典は他に数パターンの音写語を挙げるが、用例はわずかである。

スクリット原本を欠き、しばしば梵漢の対応を確認しがたい[14]。中村（2001: 7）が挙げる確実な例は以下の通り：

Hevajratantra II 1,14 *arghamantraḥ*
「獻閼伽水真言曰」（『仏説大悲空智金剛大教王儀軌経』大正蔵 18 巻 592a22）

ここに見られるようにインド仏教の密教文献では、通例サンスクリット文献で期待される *arghya-*「供養に用いる水」の代わりに、*argha-* がそのまま「閼伽水」を意味するのが通例のようである[15]。例えば 11～12 世紀頃の学僧 Abhayākaragupta の儀礼解説文献 *Vajrāvalī-nāma-maṇḍalopāyikā* に以下のように見える：*tataḥ svavāmapārśve tadarghabhājanaṃ pādyabhājanaṃ ca prokṣaṇācamanabhājanaṃ ca dhārayet*「それから、自分の左脇に、その *argha* の容器と洗足の水（*pādya-*）の容器と、撒水用および口漱ぎ用の水の容器とを配置するべきだ」[16]。中村（2001: 7）が「Ⓢ argha の音写。…Ⓢ arghya の音写とする説もある」と両論併記とするのはこのためであろう。

音写について付言する。「閼」[17]の音価を KARLGREN（1972: 85）は上古音 **·ât*、中古音 **·ât*、現代音 *o* と想定し、PULLEYBLANK（1991: 87）は前期中古音 ʔat、後期中古音 ʔat、近世音 [ɔ̀] と想定する。いま一つの音写語「遏伽」の「遏」の音価も同様に想定される（KARLGREN 1972: 93f.; PULLEYBLANK 1991: 87）。「伽」の字はサンスクリットの *ga, gā, gha, ghā* の音写にしばしば使用される（PULLEYBLANK 1991: 253）。哲学用語 *agha-*「阿伽色」の音写と対比するとき[18]、「閼」の使用は、語頭音を *a* とする閉音節の音写を意図したものと考えられる。残る問題は、サンスクリットの *-r-* 音の音写を意図したか、それともパーリ語や『シャクンタラー姫物語』に見られるような *aggha-* の如き中期インド語形を前提とするかである。辛嶋（1994: 30）はサンスクリット原音「r + 子音」の組み合わせについて、「原語のこの音を、中国の音で正確に音写することは不可能であり、我々のデータから原語における音変化を推定するのは多くの場合困難である」と述べる。「閼伽」がサンスクリットからの直接の音写か、あるいは何らかの中期インド語に基づくものかは、確言できないものと思われる。

---

(14) 塚本・松長・磯田（1989）が扱う梵語密教文献は約 1100 種にのぼるが、「これら諸文献の訳本を漢蔵の両大蔵経に求め、その結果を比較してみよう。1100 種のうち漢訳に比定できるのは 52 種で、全体の 5%にも満たない」（塚本・松長・磯田 1989: 54）。

(15) 森（1991: 1019）によれば、密教の水の儀礼に用いる四種の水はアルガ（argha；閼伽水）、パードヤ（pādya；洗足水）、アーチャマナ（ācamana；嗽口水）、プロークシャナ（prokṣaṇa；灑浄水）と呼ばれ、さらにアルガ *argha-* はこの四種の水の総称としても用いられることがある由。他方、ヒンドゥー教側のタントラ文献では、同様の文脈で *pādya-* や *ācamana-* と共に *arghya-* が用いられる（参照、井田 2004; 井田 2012）。仏教文献が *argha-* について特徴的な用法を示す理由については筆者未詳。

(16) テキストは前掲森論文の「附録」に拠った（森 1991: 1039）。

(17) この字は匈奴王妃を云う「閼氏」に用いるほか、音写語としても使用頻度は非常に低い。「閼伽」のほかには、例えば『中論』著者の Nāgārjuna を写した「那伽閼剌樹那」に使用例が見られる（玄奘『大唐西域記』巻八）。

(18) 「阿伽」は *argha-/arghya-* の音写語のひとつでもある。これは *tathāgata-*「如来」の音写語「多陀阿伽度」または *agada-*「阿伽陀（薬の名）」ないし *agha-*「阿伽色」（の一部）と構成を同じくする。「阿」は開音節の *a* ないし *ā* を音写する際に用いられるものと考えられ（例えば *āgama-*「阿含」）、*argha-/arghya-* の音写に用いるのは異例と考えられる。

略字解

AV	Atharva-Veda	MānŚS	Mānava-Śrauta-Sūtra
AVP	Atharva-Veda（Paippalāda 派伝本）	MS	Maitrāyaṇī Saṁhitā
AVP-K	AVP（Kashmir 伝本）	p	黒 YS の散文部分
AVP-O	AVP（Orissa 伝本）	PED	Pali-English Dictionary
AVŚ	Atharva-Veda（Śaunaka 派伝本）	RV	Ṛg-Veda
BaudhŚS	Baudhāyana-Śrauta-Sūtra	Saddhp	Saddharma-puṇḍarīka-sūtra
BĀU-K	Bṛhad-Āraṇyaka-Upaniṣad（Kāṇva 派伝本）	Skt.	Sanskrit
Br.	Brāhmaṇa 文献	ŚāṅkhGS	Śāṅkhāyana-Gṛhya-Sūtra
DN	Dīgha-Nikāya	ŚāṅkhŚS	Śāṅkhāyana-Śrauta-Sūtra
Lat.	Latin	ŚBK	Śatapatha-Brāhmaṇa（Kāṇva 派伝本）
LāṭyŚS	Lāṭyāyana-Śrauta-Sūtra	ŚBM	Śatapatha-Brāhmaṇa（Mādhyandina 派伝本）
KpS	Kapiṣṭhala-Kaṭha-Saṁhitā	TS	Taittirīya-Saṁhitā
KS	Kāṭhaka-Saṁhitā	YājñSmṛ	Yājñavalkya-Smṛti
m	黒 YS の mantra 部分	YS	Yajurveda-Saṁhitā

参考文献

CAPPELLER, Carl 1891 *A Sanskrit-English Dictionary*. Strassburg: K. J. Trübner

CONE, Margaret 2001 *A Dictionary of Pāli Part I*.Oxford: The Pali Text Society.

DAVIDS, Thomas William Rhys & William STADE 1992 *The Pali Text Society's Pali-English Dictionary*. Oxford: Pali Texts Society.

GANAPATI SASTRI, T. 1982 The Yājñavalkyasmṛti. New Delhi: Munshiram Manoharlal.

hakuriku 2003 「「閼伽」は「aqua」ではない」「雑記」2003-04-22 (http://d.hatena.ne.jp/hakuriku/20030422; 2013 年 11 月 29 日確認).

堀井令以知 1997 『比較言語を学ぶ人のために』京都: 世界思想社.

井田克征 2004 「タントラ文献に見られるアルグヤ儀礼について」『印度學佛教學研究』53 (1): 446－444.

—— 2012 『ヒンドゥータントリズムにおける儀礼と解釈：シュリーヴィディヤー派の日常供養』京都：昭和堂.

井狩弥介、渡瀬信彦（訳編） 2002 『ヤージュニャヴァルキャ法典』（東洋文庫 698）東京：平凡社.

五木寛之 2008 『百寺巡礼 第四巻（滋賀・東海）』東京：講談社.

辛嶋静志 1994 『「長阿含経」の原語の研究：音写語分析を中心として』東京：平河出版社.

KARLGREN, Bernhard 1972 *Grammata serica recensa*. Stockholm: Museum of Far Eastern Antiquities.

KERN, H. & Bunyiu NANJIO 1908-1912 *Saddharmapuṇḍarīka. Bibliotheca Buddhica X*. St. Pétersbourg: Imprimerie de l'Académie Impériale des Sciences (Reprinted Delhi: Motilal Banarsidass 1992).

KIM, Jeong-Soo 2010 *Untersuchungen zu altindischen Abstrakta und Adjektiven im Rigveda und Atharvaveda*. Bremen: Hempen Verlag.

小林標 1992 『独習者のための楽しく学ぶラテン語』東京：大学書林.

久保正敏 2010「国立民族学博物館 旅・いろいろ地球人 (1) 汲む器のさまざま」『毎日新聞 (2010年6月2日夕刊)』(http://www.minpaku.ac.jp/museum/showcase/media/tabiiroiro/chikyujin056; 2013年11月29日確認).

まんどぅーか 2004「梵語俗説 (1)・閼伽=aqua」「まんどぅーかのサンスクリット・ページ」(http://www.manduuka.net/sanskrit/essay/tondemo1.htm; 2013年11月29日確認).

MACDONELL, Arthur Anthony 1924 *A practical Sanskrit dictionary*. London: Oxford University Press.

MAYRHOFER, Manfred 1992 *Etymologisches Wörterbuch des Altindoarischen*. I. Band. Heidelberg: Carl Winter.

宮元啓一 1994『語源雑学の旅』東京：南雲堂.

—— 2005『仏教の謎を解く』東京：鈴木出版.

水谷真成（訳編） 1999『大唐西域記3』(東洋文庫657). 東京：平凡社.

望月信亨 1954『佛教大辞典（第一巻)』東京：世界聖典刊行協会.

MONIER-WILLIAMS, Monier 1876 *Śakuntalā. A Sanskṛit Drama, in Seven Acts, By Kālidāsa*. Oxford: Clarendon Prss.

森雅秀 1991「インド密教儀礼における水」『国立民族学博物館研究報告』15 (4): 1013－1047.

中島利夫 1976「通俗語源説と『閼伽』の問題点」『奈良大学紀要』5: 264－266.

中村元 2001『広説佛教語大辞典（上巻あ～さ)』東京：東京書籍.

Ninna-ji Official English Blog 2011 Akadana and its folk etymology September 8, 2011. (http://ninnaji.wordpress.com/2011/09/08/akadana/; 2013年6月22日確認).

西尾実、安良岡康作（校注） 1985『新訂 徒然草』東京：岩波書店.

織田得能 1917『織田仏教大辞典』東京：大倉書店.

PULLEYBLANK, Edwin G. 1991 *Lexicon of reconstructed pronunciation in Early Middle Chinese, Late Middle Chinese, and Early Mandarin*. Vancouver: UBC Press.

龍谷大学（編） 1914『佛教辭彙 第一巻』東京：冨山房.

新村出（編） 1983[3], 1991[4], 2008[6]『広辞苑』東京：岩波書店.

小学館国語辞典編集部（編） 2006『精選版日本国語大辞典（第一巻)』東京：小学館.

白洲正子 1992『十一面観音巡礼』東京：講談社.

外山映次（編） 1997『新国語例解辞典』東京：小学館.

多屋頼俊、横超慧日、舟橋一哉（編） 1995『新版 仏教学辞典』京都：法蔵館.

塚本啓祥、松長有慶、磯田熙文 1989『梵語仏典の研究 IV 密教経典篇』京都：平楽寺書店.

WALDE, Alois 1965 *Lateinisches etymologisches Wörterbuch*. I. Band. Heidelberg: Carl Winter.

Skt. *argha-/arghya-*

Sunao KASAMATSU
Sendai National College of Technology

Abstract

The Sanskrit word *arghyá-* '*valuable*; *respectable*' is the adjective form derived from *arghá-* for '*price*, *value*, *worth*' or '*respect*'. When applied to a ceremony, the former usually stands for '*respectful offering*', especially '*holy water*' even without adding the substantive *udaka-* '*water*'.

As the Chinese transcription of both of them "閼伽 *aka*" sounds similar to Latin *aqua*, and, what is more, they may refer to the same substance, it is widely believed in Japan that *aka*, Skt. *arghá-/arghya-* and Lat. *aqua* should share the same etymology. This naïve idea is so deeply rooted that it is really tough to get rid of in spite of repeated remarks to the effect that these words have nothing in common linguistically.

This paper provides examples from the Vedic and Sanskrit literature to confirm the original meaning and usage of Skt. *arghá-/arghya-*.

ISSN 2187-4859

歴史言語学

Historical Linguistics in Japan

2014年11月 第3号

目 次

『歴史言語学』第3号に寄せて …… 千種眞一 …… 1

研究論文

印欧祖語 * *ḱl-eh*$_1$*-i̯e/o-* …… 尾園絢一 …… 3

日本手話成立伝播攷：Creoloid性および跳躍的伝播
…… 末森明夫，新谷嘉浩，中根伸一 …… 21

Forum

Skt. *argha-/arghya-*，閼伽（あか），Lat. aqua …… 笠松　直 …… 53

書評

大木一夫『ガイドブック日本語史』 …… 岡島昭浩 …… 67

Gotō, Toshifumi, *Old Indo-Aryan morphology and its Indo-Iranian background*
…… 堂山英次郎 …… 73

資料紹介

Studies in Middle and Modern English: Historical Change …… 家入葉子 …… 85

『古代ロシア研究』 …… 岡本崇男 …… 93

2013年大会　講演要旨

日本語疑問文の問題点 …… 金水　敏 …… 97

ゲルマン語の過去現在動詞の意味するもの …… 菅原和竹 …… 105

2013年大会　研究発表要旨 …… 113

会員業績　2013年9月～2014年8月 …… 120

彙報・会計報告 …… 126

会則・規定 …… 129

投稿用レイアウト例 …… 136

寄贈図書・日本歴史言語学会役員等一覧 2014 年度 …… 140

日本歴史言語学会からのお知らせ …… 141

発行―日本歴史言語学会
発売―大学教育出版